インクルーシブ教育だより　VOL.１７

インクルーシブの窓

令和５年 11 月 富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班

インクルーシブ教育推進員の学校訪問日記～その１～

児童生徒の学びの場の見直しを進めている学校にインクルーシブ教育推進員が訪問しています。どの学校でも、教職員の温かなまなざしに見守られ、児童生徒が学びの意欲を高めています。そこで、今号では、推進員が見たり聞いたりした「インクルーシブ教育システムの構築を目指した取組」を紹介していきます。

「子どもが見通しをもち安心して授業に参加するための工夫」

多くの学校で１時間の授業の流れが黒板に明示されています。課題➡自分の考え➡今日の学び、つかむ➡学び合う➡振り返る などと表現は異なりますが、子供が本時の課題に取り組む意欲を高め、自分の考えを持って友達と関わり合い、授業の終末には学びの確かめを行います。

ある学校では、ユニバーサルデザインの視点や障害のある子供への合理的配慮が学習指導案の指導上の留意点に明記されていました。多くの子供を包み込み、つまずきが予想される子供に個別の配慮を行おうとする授業が展開されていました。

「特別支援教育コーディネーターが中心となる校内連携」

ある中学校の通常の学級で支援を行っているスタディ・メイトさんは、毎時間の支援日誌を書いています。その日誌は、短い文ですがスタディ・メイトさんの支援の意図や具体的な手立てが書かれてあり、特別支援教育コーディネーターから担任や管理職の先生方にその日のうちに回覧されます。コーディネーターの先生は「いつも新たな気付きや支援のヒントをもらっています。」と笑顔で話されました。見せていただくと、そこには先生方からスタデイ・メイトさんへの感謝の言葉が毎日添えられていました。優しい校風を感じました。

気掛かりな子供の支援会議を毎月開いている学校があります。保護者にも参加を呼びかけ、保護者の思いや願いに寄り添うことを大切にしています。会議の始めには、参加者全員で話し合いの目当てや流れ等を確認します。話し合いの経過は板書され、それをデジカメで記録に残して参加者全員が共有します。

子供と保護者を真ん中に置いた支援の見える化、出席者全員が主体的に話し合いに参加しやすくするための工夫と言えるでしょう。